

「空しいことば」

エペソ人への手紙 5 : 6 - 7

October.13.2024

エペソ人への手紙 5 : 6 - 7 (パウロ)

Preface

世界は、言葉に満ち溢れています。

言葉は、物事すべての始まりであり、言葉によって思いや考えが表明され、表明された言葉を具現化しながら、この世界は成り立っているように見えます。

そんなこの世界に満ち溢れている無数の言葉の最初、始まりは、創世記 1 : 3 の「光、あれ」という神の言葉でした。

この光とは、太陽や月や星々や火や炎や蛍光灯のような物理的物質的な光を超えた、あるいは違う、善悪を明らかにし、聖なるものと汚れたものを明確に分け、その光の前に覆われたままでいられるものは何一つ存在せず、隠されているもので知られずにすむものは何一つなく、万物すべてがむき出しにされる光です。

そしてこの、「すべての闇を打ち破り、闇の中に輝いている光こそが、イエス・キリストだ」と、ヨハネの福音書やヨハネの黙示録で明らかにされています。

ヨハネの黙示録 21 : 23 に、「子羊イエスが全てを照らす光であられるがために、もうこれ以上、新しい天と新しい地では、物理的物質的の代表格である太陽も月も必要としない」と書かれている通りです。

「光、あれ」、つまり、「イエス・キリスト、あれ」という神の言葉によって、今現存しているこの世界は初まり、成り立ち、営まれて行くものでありましたが、「光、あれ」「イエス・キリスト、あれ」という神の言葉に抗い、遮り、あたかも何の価値も無いかのようにそそのかす「神は本当にそんなことを言われたのですか」という創世記 3 : 1 のサタンの言葉がこの世界に放たれ、人は、その神に反する偽りの言葉に魅了され、惹きつけられ、自らの意思で乗っかり、まんまと、何か魅力のようなものが有りそうで何もない空しい言葉に抱き込まれながら、取り囲まれながら、翻弄されながら、そして発信までするようになって、人間自ら発した無数の空しい言葉たちにたましいを支配され、死に行く存在、空しい言葉の行き着く先である永遠の滅びへと陥る者となってしまいました

Part One

人は元々、言葉をもってことをなされる神のかたちに造られた存在であるがために、造られた被造物の中で唯一言葉を操り、駆使し、言葉によって物事を始め、作り出すということが出来ます。

しかしながら、「光、あれ」、「イエス・キリスト、あれ」という、言葉と言われるありとあらゆるすべての言葉の最初である言葉を失ってしまったがために、諸国の民を惑わす闇を打ち破る光とは関係のない物理的物質的光にのみ心惹きつけられ、浸り、染まり、結果的に空しい言葉ばかりを口にし、取り入れ、空しい言葉によって物事を始め、空しい言葉によって操作され、空しい言葉によってまた何か空しいことを始め、空しい言葉によってまた空しい何かを作り出し、空しいことに囲まれながら、生きているようなふりをして死んでいます。

にもかかわらず、空しいことが当たり前のようになってしまっているからでしょうか、空しさにも気付かず、気付いたところで、その空しさをまた違う空しい言葉で満たそうと、出口のない堂々巡りのような空しい言葉に取り囲まれ、取りつかれ、考えや思いや思想や価値観や世界観や人生観や理性や知性や感性に至るまで、空しい言葉に満ち溢れるようになってしまいました。

第一テモテ6：5で使徒パウロが、「知性が腐って真理を失い」という表現をしておられますが、正に、「光、あれ」「イエス・キリスト、あれ」という言葉を失った私たち人間の知性は腐ってしまい、金銀を神とし、金銭を神とし、人を神とし、プライドを神とし、知識や学や技術を神とし、趣味嗜好や心の赴くあらゆることを神とし、人の作りだした物を神とする多種多様な神もどきに満ち溢れた空しい世界を構築してしまいました。

何かありそうで何もない世界、日々新しいものが生み出されているかのような錯覚に陥りながら、昔あった同じ悪を繰り返している世界、「日の下にあるすべては空しい」とソロモンが評するような世界を作ってしまった。

科学技術がどうだこうだ、新しい理論だか論理だかがどうだこうだ、誰が凄くて誰が凄くないのか、凄い人を作り上げ祀り上げて、そこに何か凄いものもあるかのように権威を持たせ、憧らせるために表彰して、何か世界を変えることが出来るかのような気にさせて、また新たな空しい言葉を吐き出し、没頭し、熱中させ、離れられなくなり、そこにあたかも何かの答えがあるかのように思い思わされている。

「光、あれ」という神の言葉から始まり造られたこの麗しくも美しい天然世界の生物多様性が、たったこの50年の間に人間の手で68%も減少させてしまったにもかかわらず、未だに、「人間はすごい。人間は出来る。人間には可能性がある。人間こそ答えだ。人間は偉いんだ。私は凄いんだ。なんで僕の私の凄さに気付こうともせず、この世界は回っているんだ。我こそ神だ」という欲と渴きと裁きと空しい言葉に満ち溢れていることを感じないのか、自分で自分の首を絞めていることにも気付かないのか気付こうとしないのか、天地万物をお造りになった唯一の神を認めようとしめない世界。

だから、どんなに持っても所有欲が衰えることはなく、どんなに食べてもたましいが満たされることもなく、どんなに勝っても人生・いのちにおいて勝利したという確信も得られず、どんなに経験しても心は傷つき、どんなに称賛さ

れても恐れが無くなることはなく、空しい言葉に取り囲まれていることに嫌気がさすことさえも忘れてしまい、当たり前になり、「そうなんだ」と、「それでいいんだ」と、「それが現実なんだ」と、自らに言い聞かせ、納得させることをもって人生としてしまう。

Part Two

そんな空しい言葉に満ち溢れている世界に一石を投じるどころか、「言葉の空しさ」から私たちを開放するために 光として、この地上にお生まれなされたのがイエス・キリストです。

「光、あれ」というすべての言葉の最初であられるお方が、人の姿をもって現れなさいました。

空しい言葉によってそのいのちを、その人生を、その生き様において道を失っているこの世界の人々に、私たち罪人に、「光、あれ」という言葉を取り戻させて下さるために、「光、あれ」という唯一の空しくない言葉に再び立ち返ることが出来るように、来てくださいました。

ゼカリヤ書1：1－4（パワポ）

神さまから私たち人間たちへの語り掛けなされる言葉は、ひたすらに、「わたしに帰れ。わたしに帰れ。わたしに立ち返れ」という言葉です。

でも人は、その言葉に立ち返ろうとしないので、神自ら人の姿をお取りになって、私たちの肉眼で見ることの出来るかたちとして現れなされたのが、「光、あれ」という言葉そのものであられるイエス・キリストです。

イエス様がそのお働きを始めなされた時、聖霊に導かれて、四十日四十夜断食をされたことがあります。

肉体的には瀕死のような状態のイエス様に、その肉体の命を保つのに最も必要な食べ物をもって誘惑するという空しい言葉を掛けてきた悪魔に、イエス様が、この世に無くなってしまった最も大切なこと、私たち人間にとって根本的に、実質的に、先ず第一に必要な不可欠なものを宣言して下さいました。

「人は、パンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」という言葉です。

このイエス様の言葉を解釈する時、「イエス様は、私たちが生きるために必要な衣食住を否定しているのではなく、衣食住が必要なのは当然のことで、それに加えてさらに必要なものが神の言葉なのです」というように解釈されることがありますが、「本当にそうなのかなあ」と、私は思えてしまいます。

四十日四十夜、何も口にしていないカピカピに干からびて、倒れて今すぐにも死んでもおかしくないようなお体のイエス様にとって、その生身の体のいのちを保つために必要なものは、ほんの一口の水であり、ひとかけらのパンであり、スプーン一杯の重湯でした。

それこそ、イエス様のその生身の体のいのちを保つのに最も必要なものだったはずです。

ですが、イエス様はここで何と言っていますか？

「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる」と宣言されます。

「罪ゆえに、残念ながら滅びることが決まってしまうこの肉体に執着する生き方ではなく、永遠に残るたましいにおいて永遠に生きる生き方があるのです！」と、「たましいにおいて生きなければ、どんなに肉体を着飾ったところで、どんなにいい物を食べて脂ぎったところで、生きたふりして死んでいくことに何ら変わりはないんだ」と、「土のちりとなって終わってしまうどころか、永遠の滅びという燃えるゲヘナで永遠に苦しみながら、その永遠の死を、永遠に代々限りなく受けなければならないんだ」と、「パンによって保たれるいのちは果かないものであり、パンによっては保つことの出来ないまことのいのち、永遠のいのちが神の言葉によって保たれることこそ、いのちを生きるということなんだ」と、「そのことを我が身をもって、この世界に、あなたがたに知らせるために、わたしは聖霊に導かれて四十日四十夜断食をし、肉体的に干からびた瀕死の状態をもって、人々を空しい言葉で虜にしている悪魔の策略を暴露するために、今こうしているのです！」と仰っているわけですね。

お金が足りないことが最も大きな問題のように思え、いいものが食べられないことが侘しく感じ、いい家に住み、いい車に乗ることがいい人生の絶対条件のように思え、何でもいいからとりあえず勉強し、励み、熱中し、色んな知識に精通し、とりあえずスマホから発せられる無数の言葉を体内に入れ続けることが息抜きだと思ひ、

神の言葉によってたましいが生きるという生き方は面倒くさく感じるから後回しにし、そこに時間を割くことは忙しくて出来ないし勿体ないと思ひ、お金を稼ぎ仕事のためなら教会に行くけれども、礼拝のために教会行くのは億劫で、神の言葉に時間や財を投資することよりも、お金自体を増やす投資こそ人生を豊かにするという空しい言葉は真に受け、たましいが死んでいく。

光を失い、たましいが死んでいく。

Part Three

マタイの福音書 6 : 24 - 34 (パワポ)

今、私たちに足りないのは、私たちのいのちに足りないのは、私たちの子どもたちに足りないのは、着るものでもなく、食べるものでもなく、飲むものでもなく、華々しい経歴や生い立ちでもなく、いい音楽やいい教育やいい教養でもなく、いい医療でもなく、神の国と神の義を第一に求めることです。

どんなに着ようが、どんなに食べようが、どんなに飲もうが、どんなに学ぼうが、どんなに経験しようが、どんなにいい音楽を聴こうが、どんなにいい教

育を受けようが、どんなにいい教養を身に付けようが、どんなにいい医療を受けようが、神の国と神の義を第一に求め続けなければ、そこにいのちはありません。

マタイの福音書 10 : 26 - 39 (パウロ)

私たち人間は、恐れずに生きることは出来ないように造られました。

では、何を恐れるべきなのか？

神を恐れるのです。

神を恐れることには平安といのちが伴いますが、神以外のものを恐れることには恐れと不安しか伴いません。

そのような恐れから解放される唯一の道は、このイエス様の言葉に聞き、主イエス・キリストを、父なる神を恐れることです。

どんな物事やどんな人の前であっても、イエス様を認めるんです。

イエス様を認めないことは、たましいの死を意味します。

イエス様を、物事すべて、人様すべてにおいて認めるようになりますと、いのちが分かります。

この肉体のいのちに執着するいのちではなく、イエス様の十字架の死によって与えられた肉体を超える本当のいのちが、永遠のいのちが分かります。

そのいのちが失われてしまうことに、恐れを抱けるようになります。

最も大切な唯一価値ある恐れを抱くようになります。

テモテへの手紙第一 6 : 3 - 12 (パウロ)

神を信仰することは束縛ではなく、解放、自由です。

むしろ、唯一まことの神イエス・キリストを信じないことが迷い出ることであり、多くの苦痛で自分を刺し貫くことです。

そして私たちの戦いは、如何に物持ちになるのか金持ちになるのかの戦いではなく、如何に信仰の戦いを立派に戦い、ついに、永遠のいのちを獲得するかしないのかの戦いです。

「ほら昔、私一度イエス様信じたから、もう大丈夫！」ではないということです。

パウロとともに生きた元パウロの弟子デマスのように、今の世を愛して、永遠のいのちを獲得したのかしてないのか分からなくなってしまうたら、何という悲劇でしょうか…

もう一箇所です。

テモテへの手紙第二 3 : 1 - 17 (パウロ)

(今の時代を予見し、その時代を生きている私たちが、最も大切にしなければならぬことについて言っている箇所です)

私たちは困難な時代を生きています。

キリストを信じるといふ者たちでさえ、自分だけを愛し、金銭を愛し、神を冒瀆し、人と和解せず、神よりも快楽を愛し、見かけは敬虔ぶっても、敬虔の力を否定する者になっているかのようです。

そして、イエス様のために、イエス様にあつて敬虔に生きるための迫害を覚悟出来ません。

世の中に認められるような形で光となり、地域に輝くことはしたいと思ひますが、世の中に認められないという形で光となり、地域に輝くことは避けます。

迫害が怖いから。 殉教が怖いから。 キリストが全てでないから。

キリストのために辱められるに値する者とされたことを喜べないから。

そして何よりも、そのような生き方を矯正し、義に生きるための訓練へと導いてくれる知恵を与えて下さる聖書を取りません。

持ちません。 開きません。 読みません。 聞きません。

祈りません。 跪きません。 胸を叩いて泣くこともしません。

なぜならば、とりあえず、着られる服があり、礼拝終わったら食べられるランチがあり、帰る家があり、この滅びゆく肉体を保つための糧は、一先ず備わっているから。

それゆゑに、神の言葉の必要性が見えず、聞けず、悟れません。

聖書に親しむことが出来ません。

パンで保つ体を、一先ず保たせるだけのパンがあるから。

イエス様が命がけで話された、「人は神の口から出る一つ一つのことばによつて生きる」といふいのちの言葉が、空を打つかのよゝうにしか聞こえてきません。

神学生も聖書を開きません。

神学校の先生も聖書を開きません。

牧師も聖書を開かない。そりゃ信徒だつて、聖書を開かなくなるでしょう。

キリストを信じていると言ひながら、パソコンやタブレットやスマホは開くけれども、聖書を開かないのですから、宣教・伝道なんてなるわけもなく、神学校がつぶれそうで、教会がつぶれそうになっている。

必然的な結果でしょう。

世界の人口は増え続けているのに、「聖書を神の言葉だ」と教える神学校は減り続け、聖書を一切開くこともなく、神学という学問だけは転がり続け、教会が死んでいくよゝうな時代です。

「偽善者たちよ。あなたがたは地と空の様子を見分けることを知つていながら、どうして今の時代を見分けようとしなひのですか」といふイエス様の言葉が、毎日よゝうに鳴り響いてきます。

物凄ひ靈的鈍さの中で、私たち、信仰の戦ひをしなければならなくなつてい

ます。

旧約聖書の預言者たちが語った言葉の世界を、そっくりそのまま、今私たちは生きています。

Conclusion

毎日新聞を読み、ニュースを聞き、本を読んだり、笑いの言葉に笑ったり、知識や学術の言葉に触れたりしますが、それらの言葉に毎日触れていると、堂々巡りのような空しいことばに思えてきます。

事件があり、事故があり、天災があり、学費が気になり、生活費が気になり、利潤が気になり、あの人がこの人が気になりながら紡いだのか、吐き出したのか分からないような、神の言葉ではない、人間の空しいことばばかりに触れていますと、たましいが渴きます。

人の空しいことばによっても、砂嵐のような心が一時静かになることはありますが、嵐が起こったらまた舞い上がって、先が全く見えない視線を遮る砂はそのまま残っています。

でも、神の言葉は生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに貫き、心の思いやはかりごとを見分けさせ、箒と塵取りで、砂を、綺麗さっぱり掃き取るかのようにしていただきます。

エペソ 5 : 6 (パウロ)

空しいことばでだまされてはいけません。

空しいことばにだまされることから脱却するために私たちに必要な唯一のものは、神の言葉です。

皆さん、神の言葉を取っていますか？

持っていますか。

開いていますか。

食べていますか。

飲んでいますか。

御言葉を聞くのではなく、御言葉に聞いていますか。

私が主体となって、御言葉を道具のように利用するために、御言葉を聞くのではなく、神が主体となられて、御言葉に聞いていますか？

「主なる神様」と言いながら、実のところ、「主なる私に、しもベイエス様がついて来てくれる」ように、神の言葉を扱ってはいないでしょうか。

この聖書の御言葉に聞くことが唯一、私たちを、空しいことばでだまされることから救ってくださいます。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ書 5 : 6 a